

図書館だより

文化学園図書館

文化学園大学・文化ファッション大学院大学
文化服装学院・文化外国語専門学校

No.159

2015年1月20日発行
東京都渋谷区代々木3-22-1
TEL.03-3299-2395
FAX.03-3299-2604

天空の書架

文化外国語専門学校 学校長 古屋 和雄

“トショカン”という響きに甘ずっぱいものを感じるのはなぜだろうと記憶の糸をたぐってみると、高校時代にまで遡りました。勉強など苦手な私は、本の隙間から見える先輩女子高校生の姿にドキドキし、ひょんなことで視線が合ったりすると、それだけで天にも昇る思いがしたものです。

正真正銘の「天にも昇る」書架に巡り合ったのは、それから30年以上たった2001年11月のこと、作家司馬遼太郎記念館の大書架でした。記念館は東大阪市のご自宅と、隣近する安藤忠雄さん設計の建物で構成されていて、雑木林風の庭の小径から、数々の作品を世に送り出した司馬さんの書斎を見ることもできます。その司馬さんの精神を形にしたと思えるのが3層吹き抜けで高さ11mに及ぶ大書架なのです。棚の数だけで2300余り、蔵書は2万冊にのぼります。

司馬さんとはご縁が深く、毎年2月12日のご命日の前後に開かれる「菜の花忌シンポジウム」の司会を担当して18年になります。毎回司馬作品をもとに、混沌とした今の時代に対して司馬さんなら何と語りかけたのだろうか、皆で考えてみようという会です。

司馬さんの広い知識と深い洞察力は、その読書

の量によっても知ることができます。かつて司馬さんの書斎を訪ねた時、長い廊下の両側が本棚になっていました。しかもそこに並んでいるのは、「〇〇町誌」「△△村の歴史」といった第一次資料ばかりでした。先頃亡くなったみどり夫人に聞いたところ司馬さんは作品をまとめるよりこうした原典に触れている時間のほうが幸せそうだったそうです。新聞記者出身の司馬さんらしい話です。一緒に取材旅行に行ったディレクターの話では、毎晩車座になって縦横無尽に繰り広げる雑談が楽しみだったといいます。文章でも「余談ながら」と前置きし、話が膨らんでいくのを待っている読者も少なくありません。

「余談ながら」大書架の天井の片隅に人間の顔の大きさのシミがついています。一見してそれは坂本竜馬そっくりです。小説の主人公もこの空間が気に入っているようです。図書館とは不思議な場所で、知識を得るばかりではなく、何かを「感じる」「考える」ところなのかもしれません。

そうそう、ついでに私も「余談ながら」高校時代、読みもしない本の向こう側に感じていた憧れの先輩は、その後旅行会社に勤めたと耳にしました。添乗員として多くの人を本物の天空に案内したことだろうとひっそり思っています。

変化するモノクロームの世界『マイケル・ケンナ写真展』

文化学園大学准教授(モードデッサン担当) あをやま めぐみ

今から20余年前、新宿のフォトギャラリーである写真と出会った。水墨画とも、モダンな図形のイラストとも取れる大胆な構図の作品である。写真家はMICHAEL KENNA(マイケル・ケンナ)。彼の写真集を購入することになったいきさつは今でも鮮明に思い出せる。

その頃のモノクロ写真といえば、遠方の山脈まではっきり見渡せるアンセル・アダムスの風景写真が有名であった。それに対してマイケル・ケンナのモノクロ写真は日常的で身近な題材を写している。しかし人間の気配はない。庭園やクローズアップされたエッフェル塔や森の中の廃屋(実際には古い記念塔なのかもしれない)。初めは構成の面白さが目を引くが、じっと見ていると建造物に意思があるように見えてくる。また、時間のない異空間に入っていくような不思議な感覚を覚える。詩、郷愁、静寂、無……どう表現したらいいだろうか。ちょうど私自身もモノクロのフィルムを持って高原や空、都内の建築物などの写真撮影に凝っていた時期と重なっていた。ファインダーの中の切り取られた世界の面白さと、現像後に目にする色彩のない世界の静けさが新鮮に思えた。

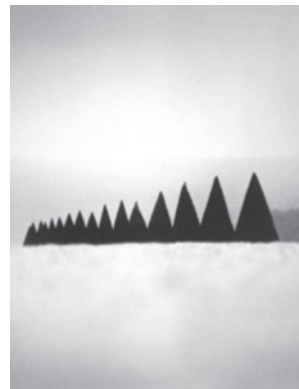
当時私は転職すべく退職願を出したところであった。しかし入るはずだった会社の上層部から、訳あって解散したと連絡を受けた。その時頭に浮かんだのは「心惹かれる本は食事を削っても買っておく」というフリーの図案屋の言葉だった。テキスタイルプリントを企画する職場には、多くの図案屋が出入りしていた。それから数年間、自分もフリーのイラストレーターとして仕事をした。

この20余年であの本を開いたのは数えるほど

だ。それでも時々思い出す。白い背景に黒い三角。竜安寺の枯山水のようであり、抽象画のようであり、古い映画のワンシーンのようであり、様々に変化する。もしかしたら今の自分を知る、何かのバロメーターになっているのかもしれない。これからまた違ったイメージとして思い浮かべるかもしれない。図案屋の言葉が後押しして所有することになった、心惹かれた1枚がある本なのだ。

実はあの写真に会って程なく、彼の個展が都内の小さなギャラリーで開催された。本人のギャラリートークもあるという。電車を乗り継いでギャラリーに向かった。長身で(予想に反し)気さくな笑顔のイギリス人だった。トークの後、本を買いサインをしてもらった。その時たまたま持っていた、自分が撮ったモノクロ写真を手渡した。水墨画のような山の木の写真だった。彼は笑って受け取ったが、後から思えば汗が出るような突飛な行動だ。

若かりし頃の苦い思い出と、心に入り込んだ写真が滞在する、開かなくても見える1冊である。



Conical Hedges, Versailles, France 1988

*篠原まゆみ、生形貴英企画編集『マイケル・ケンナ写真展』
Gallery Min ©1990 (748/K)

歌川国貞(三代豊国)画『相撲人形花の取組』

文化学園大学准教授(日本服飾史担当) 福田 博美

日本の相撲の古くは、『古事記』の建御雷神タケミカヅチノカミと建御名方神ミナカタノカミの力比べ、『日本書紀』の野見宿禰のみのすくねと当麻蹠速たいまのすくもの角力すもうに遡ると伝えられる。

本来、相撲は農作物の五穀豊穡の吉凶を占う儀礼として始まった。土俵しんめいづくり、神明造の屋根、塩、力士が前にさげる「さがり」、横綱しめの注連こへいに飾る御幣など、いずれも神事と深い関わりがある。

奈良時代に始まる宮中での七夕の「天覧相撲」は、平安時代には「相撲節会すまひのせちえ」とされた。鎌倉時代以降、武術の鍛練として奨励された相撲は、「上覧相撲」として開催され、武将たちに愛好された。一方、諸国を巡り相撲を行う武士も現れた。江戸時代初期、「勸進相撲」が興行されて、相撲取りの番付のようなものができた。寛政元(1789)年、谷風樞之助たにかせかじのすけ(1750-95)と小野川喜三郎(1758-1806)に初の横綱免許が与えられた。

江戸時代中期、相撲人気とともにその風俗を描いた錦絵(多色摺りの浮世絵)の「相撲絵」が大量に制作された。中でも力士の化粧回し姿や外出姿、行司を配した取組絵の多くが大判の「一枚絵」で、土俵入りの光景や力士たちの群像は「三枚続」の形式でワイドに描かれることが多かった。

今回紹介する『相撲人形花の取組』は江戸時代後期の花形力士の操り人形と美人を取り合わせたシリーズの作品である。本館には6図所蔵され、相撲人形を操る美人の上半身が描かれた「大首絵」で、大判(38×25cm)の錦絵である。

絵師は、署名の「國貞改二代豊國画」から初代歌川国貞(1786-1864、以下国貞と表記)である。国貞は初代歌川豊国(1769-1825)の門人で、役者絵や美人画に秀でた絵師であり、多くの相撲絵を描

いた。弘化元(1844)年に、二代豊国の襲名を自称した。しかし、すでに文政8(1825)年に初代豊国の養子「豊重」が二代目を襲名していたので、実際は三代豊国である。

制作年は署名から弘化元(1844)年とされるが、国貞研究の第一人者である新藤茂氏から弘化2(1845)年頃とのご示唆をいただいた。

落款(印章)は、「年」の書体を崩した「年玉」印で、歌川一門の印とされる。

版元は「喜多孫」の印から喜多屋孫兵衛、改印は「渡」、「應需」の印は購入者の求めに応じて作成した印で、出版地は江戸である。

6図に登場する力士の名前は、「顔」と「回し」の意匠によって判別できる。第八代横綱しらぬいだくの不知火諾右衛門えもん(1801-54)(図1)、荒馬吉五郎(1809-54)(図2)、小柳常吉つねきち(1817-58)(図3)、第九代横綱となる秀ノ山雷五郎みづのやまのらいうご(1808-62)、三ツ鱗龍八(生没年



図1 第八代横綱「不知火諾右衛門」の相撲人形を操る美人

不詳)、小柳春五郎(1798-1858)である。この他に、相生松五郎(1803-53)、御用木雲右衛門(1807-67)などの作品がある。顔を正面に描いたのは図1のみで、他は左右の向きが異なり、まるで二枚が対になるようである。

「相撲人形」の古くは、江戸中期の「板角力」の玩具とみられ、紙製の人形も登場した。ここに描かれた操り人形は、手で操作するもので、串が胴と両方の前腕につけられている。これはおそらく当時の人形浄瑠璃の発達に伴い、力士をかたどったものと推察される。

横綱の土俵入では、「四股」を踏む際、身を浄める意味で「注連縄」を身につけ、図1では不知火諾右衛門が腰にまとった。十両以上の力士が土俵入に着ける「化粧回し」は、現在では博多織や西陣織が主流であるが、当初緞子とんすを用いたため「緞子」と呼ばれた。その紫色は、横綱許しの色とされ、不知火諾右衛門と秀山雷五郎にみられる。国貞は両者の「横綱土俵入之図」を各々三枚続に描いた。

江戸時代は大名お抱えの力士が多く、各藩それぞれの化粧回しをつけて土俵に上がった。横向きの力士(図2)は化粧回しから八戸藩のお抱えで、弘化元(1844)年に前頭2枚目から小結へ昇進した荒馬吉五郎とみられる。秀山雷五郎と三ツ鱗龍八は違い釘抜き模様から盛岡藩である。萩藩お抱えの力士として有名な第六代横綱阿武松緑之助あぶのまつみどりのすけ(1791-1852)の門人として活躍したのは、弘化2(1845)年に小結に昇進した小柳常吉と小柳春五郎である。両者とも紅白の化粧回しで、藍色の房飾りは常吉、浅葱色が春五郎である。春五郎は緑之助引退後に大関に昇進し、天保後期の土俵を飾った。

江戸相撲の黄金期には、谷風梶之助と小野川喜三郎、幕末は小柳常吉と荒馬吉五郎の好取組が人気を呼んだ。国貞は「小柳・荒馬仕切の図」を大判三枚続で描いた。まさに図2と3の対戦である。ちなみに、小柳常吉は嘉永7(1854)年にペリーが来日した時、アメリカ

人の水兵3人と同時に対戦して勝った逸話が残っており、その前年に、国貞は一枚絵で闘志みなぎる小柳常吉の風貌を描写した。

「相撲人形」を手にした女性たちに着目したい。図1のお歯黒をつけた女は、島田髻まげに鬘べっごう甲製とみられる櫛・笄くし・簪こしがいをつけた。流行の黒の掛衿をつけた藍と浅葱色の縞に鼠色の緋柄の留袖を二枚重ねて一つ前に着た。緋色の五分長襦袢を袖口にのぞかせ、萌黄色の襦袢の衿元をつぼめた。黒の広幅帯は二羽の鳥の丸紋で茶色の更紗風花柄地との両面仕立ての鯨帯である。図2は成人直後の年若い女とみられ、島田髻には緋色の飾り裂が巻かれた。緋襦袢には鼠色の衿、黒の掛衿に縞模様の留袖姿である。本来脇を縫いとめた留袖だが、この頃には身八つ口ができ、この後ろ姿に表現されている。鯨帯は紫と茶色の花柄で、前上部で折り曲げた。図3は振袖の袂を持って人形をかざした娘の姿である。緋襦袢には紫の衿、図1・2と同様に二枚のきものを一つ前に装い、表着は鼠色地に様々な紋尽しのきもので黒の掛衿をつけた。地味な鼠色は当時の流行色で娘たちも好んで用いた。また、黒と紫の鯨帯をやや斜めに締めた。微笑む表情に若さを感じる一枚である。同時期、国貞は縞柄を背景とした「誂織当世島」を描き、本稿で紹介した3図以外にも縞柄が描かれた。最新の流行を着こなす伊達で粋な美人たちを描くことで相撲をいっそう華やかに表現した作品といえる。



図2 後姿が特徴的な「荒馬吉五郎」



図3 敵めしい面構えの「小柳常吉」

通勤中の読書の楽しみ

文化ファッション大学院大学教授(経営戦略論担当) 照井 義則

今どきの通勤電車内では、スマホやタブレットを脇目も振らず見ている人がやたら目につく。私自身は相変わらずの紙媒体の活字派で、電車の中では本を読んでいることが多い。昔は商売柄もっぱら新聞を読んでいたが、今どきは新聞を広げている人はあまり見かけないし、満員電車の中では周りの迷惑顔も気になりだして、やめにした。

ということで、今は往復2時間近くの通勤電車内での貴重な時間を、文庫本を読んで過ごしている。困るのは夢中になって乗り過ごすことがあることだ。最近はやのせいか、注意力が散漫になったせいか、よく乗り過ごしてしまう。

最近ハマっているのは、徳富蘇峰著の『近世日本国民史』だ。古くさそうなおいのする歴史書で、なんと全100巻にも及ぶ大著である。本屋さんには置いていないし、立ち読みできないので、はじめの数冊は本学図書館で取り寄せてもらって読んでみた。これが意外と面白い。今どきの歴史小説には読み応えのある面白いものがたくさん出回っているが、明治の知識人が書いた歴史ものも実に面白くて新鮮だ。しかも、有り難いことに、文庫本化されて現代人にも読みやすくなっている。ただし、文庫本としての再刊は原刊本100巻すべてではなく、その半分の50巻にとどまっている。それでも、すべて読了するまでにいつまでかかるかわからない、気が遠くなるほどの量である。

本書の内容を簡単に紹介すると、戦国日本を統一した織田・豊臣時代に始まり、江戸時代を経て明治時代末までの約370年間の日本の歴史を取り扱っている。タイトルは「近世日本」となっているが、今

日主流の時代区分によれば、「近世日本」と「近代日本」を取り上げていることになる。本書の大きな特色は、娯楽的な要素を多く含む歴史小説とは異なり、各時代に得られる史実を実に丹念に調べて書かれていることだ。だから、日本史の教材として読むことができる。もちろん蘇峰自身の独自の時代認識・評価や人物評価なども含まれているが、それらの点も読んでいて面白いし、今日でも十分な説得力があると思う。

近代日本にはとてつもない巨人がたくさんいたが、徳富蘇峰は確かに明治が生んだ偉大な巨人の一人だ。明治・大正・昭和の長きを通じて日本の代表的な言論人として活躍した上、途中、新聞社を創立して社長をしたり、貴族院議員にもなっている。

本書は、日本の正しい歴史を残したいという蘇峰の一念で、なんと55歳(1918年)の時に執筆を開始し、89歳(1952年)の時にようやく100巻に至って脱稿したという。原稿用紙にして17万枚、文字数では約2,000万字弱におよび、ギネス世界記録に「最も多作な作家」と書かれているほどの大作であるという。実にとんでもない巨人だ。

なお、本書との出会いのきっかけは大沼理事長の一言。日本のファッションの歴史に関する理事長講話を何度か伺っているうちに、その知識の源はなんだろうとずっと気になっていたが、たまたま食食でお会いした時にさりりと教えていただいた。

*徳富蘇峰[著]；平泉澄校訂『近世日本国民史』
(講談社学術文庫) 講談社 1979-1996 (210.08/T)



図書館からのお知らせ

小平図書館閉鎖のお知らせと、その後の資料の利用について

現代文化学部の新都心キャンパスへの移転に伴い、小平図書館は3月末をもって閉鎖します。小平図書館の資料のうち、心理学や観光学などの一部の図書と雑誌は4月から新都心図書館で利用できるよう準備中です。小平図書館に残った資料のデリバリーは週2回程度行います。ご不便をおかけしますが、ご理解いただきますようお願いいたします。

春季休暇貸出期間について

以下の期間、春季休暇貸出を実施します。

	新都心キャンパス	小平キャンパス
在学年次生・教職員		
貸出期間	2/9(月)～3/14(土)	2/9(月)～3/10(火)
返却日	4/9(木)	
卒業(修了)年次生		
貸出期間	2/9(月)～3/4(水)	
返却日	3/4(水)	

※卒業年次生の最終貸出日は3/4(水)です。以降の貸出はできませんのでご注意ください。

※小平図書館で借りた資料は、4月以降は新都心図書館に返却してください。3月の閉館期間中の返却については図書館ホームページ等でお知らせします。

図書返却のお願い

延滞資料をお持ちの方は速やかに返却してください。資料の返却が遅れると一定期間、貸出・予約・取置き停止のペナルティが発生します。

特に卒業年次に当たる学生は、借りたまま卒業しないよう、もう一度確認してください。図書館の資料は今後も多くの後輩たちに利用されるものです。郵送でも受け付けますので必ず返却してください。

閉館時の返却はブックポストをご利用ください。

年度契約の教職員および臨時職員の方へ

標記の職員で、平成27年度への継続が決定している方は、春季休暇特別貸出ができます。図書館カウンターに申し出てください。

3月で卒業(修了)する学生のみなさんへ

図書館は卒業後も利用することができます。ただし館内閲覧・コピーのみで、館外貸出はできません(閲覧・コピーも資料によっては制限があります)。卒業生の入館受付時間は図書館ホームページでご確認ください。

利用の際には、卒業生であることを証明する下記のいずれかを受付に提示してください。

- ①同窓会会員証(大学:紫友会、学院:すみれ会・もみじ会、BFGU:OBOG会)
- ②卒業確認証

大学(新都心:教務課)、学院(学務課)、BFGU(教学事務室)、BIL(教務部)各窓口で発行します。夜間と土曜日は、卒業確認証を発行できない窓口もありますので、事前にご確認ください。

なお、卒業生が利用できない期間があります。短縮開館期間などもありますので、詳細はホームページ「卒業生用開館カレンダー」で確認するか、電話で問い合わせてください。

※延滞資料がある間は利用できません。

学内進学する学生の方へ

学内進学する学生は、進学が決定するまでは卒業年次生扱いとなります。3月上旬に進学決定後カウンターに申し出てください。貸出期間・返却日が在学年次生と同じになります。

不明な点は下記にお問い合わせいただくか、ホームページをご覧ください

TEL : 03-3299-2395 (新都心キャンパス) [URL] <http://lib.bunka.ac.jp>

twitter と facebook にて図書館の情報を発信しています

[twitter] <https://twitter.com/bunkalib> [facebook] <https://www.facebook.com/lib.bunka>